

や や や の は な し

吉行淳之介

文藝春秋

やややはなし
吉行淳之介

やややはなし

一九九二年三月一日 第一刷
一九九二年三月三十日 第二刷

(定価はカバーに
表示してあります)

著 者 吉 行 淳 之 介

発 行 者 豊 田 健 次

発 行 所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町三二三
電話代表(〇三)三三六五一二二一

印 刷 所 大 日 本 印 刷

製 本 所 矢 嶋 製 本

万一、落丁乱丁の場合は

お取替え致します

やややのはなし

目次

*

七草の日 10

十年間 14

やややのはなし 16

C R A N Kについて 27

車の運転 31

お酒と酒と日本酒 33

美人六百年周期説 39

雨傘のはなし 48

蜜豆のはなし 51

パンダの名前 57

L U XとD D T 59

おい結城くん 61

郷里からの手紙 63

ちゆるちゆる 65

七五三 67

下駄 70

蟹の産卵 73

七つ数えろ 75

※

辻潤から買った詩 78

「岡山地方方言集稿本」 80

『ルーフォック・オルメスの冒険』 84

メセンとシセン 89

自分と出会う 91

自作再見『夕暮まで』 94

『暗室』メモのこと 97

「厄年」の頃のこと

102

『二代男』の世之介

107

玉の井と鳩の街

113

気に入らぬ風もあろうに柳かな

115

ある奇術師の言葉

117

トリックあれこれ

121

みどり色の板の道

123

小道具たちの風景

126

子供の時間

194

野口富士男氏のこと	210
村松友視その風貌	214
『ご先祖サマは、偉かった』	220
藤子不二雄の1と2について	222
富永一朗との奇縁	229
谷田昌平との交友	231
中島和夫氏との縁	232
森茉莉さんの葬儀	234
ふしぎなテープ	238
昭和二十三年の澁澤龍彦	242
色川武大追悼	246
土門拳のある一面	251
柴鍊さんの個人講義	254

小川徹逝く 260

川端康成その円弧と直線

262

あとがき

277

初出一覧

278

やややはなし

装帧·坂川栄治

*

七草の日

「天皇」↓日本の君主の尊称。「天皇陛下」↓天皇の敬称。……と、手もとの辞書にそう出ていた。こういうことにまで気を使う世代に私は属し、以下「天皇」と表記する。

一月七日になった夜、寝そびれてベッドでぼんやりしていた。前の年の大晦日、部屋で転んで腹を打ち、軽い打身と捻挫が出てきた。痛くはないが、寝がえりなどすると辛い。

誘眠剤を一錠嚥み足してふと気にかかり、テレビのスイッチを入れてNHKを見たのが午前五時三分過ぎくらいだった。画面には二重橋だったか宮内庁の建物だったか、その写真が出ていて、下のテロップに『次のニュースは午前六時です』とあった。この言葉は正確ではないが、午前一時だったかにスイッチを入れたときと同じものだった。前年九月の天皇吐血のときには、一時間おきにニュースがあり、『ご容態急変の折には速報します』とかいう言葉もあった。

その文字はいつの間にか消え、ニュースの間隔も長くなり、午前一時のテロップを見ればその夜に異変はない、というかんじになっていた。

それなのに、なぜ私はスイッチを入れたのか。それも、あと五分遅ければ、画面には慌しい場面が出ていたのである。そのまま仮眠して、目を開くと一月七日午前十時だったので、テレビのニュースを見ようとした。そして、そのとき天皇崩御を知った。

九月十九日の天皇吐血のあと、すでに天皇は崩御で発表の時期についての考慮がなされている、と国民のかんりの分量はそう疑っていた。私は病院にしばしば行かなくてはならないので、行きかえりのタクシーの運転手たちからも、そういうかんがえを聞いた。そして、ソウルのオリンピックが終った頃が、発表の時期ではないかという意見が圧倒的だった。

そういう疑いは、やがて私の中で消えていったが、なんとなく微量に残っていた。「正月あけの七草の日」つまり一月七日というかんがえがかすかに起ってきて、その日の早朝にテレビのスイッチを入れたようだ。ただし、今度はそういう説はどこからも聞えてこなかったが。

天皇が亡くなられたことを知ったとき、昭和は長かったな、そしてじつにいろんなことがあったな、というおもいだった。私は大正十三年生れだから、ものごころついたときは昭和で、ずっと昭和を生きてきたことになる。

その日は、なんの予定もなかったし、ベッドを離れにくい体調なので、そのままテレビを見つづけた。「大正」という元号の由来をはじめて知ったが、もう忘れた。「大」と「正」とをそれぞれ中国の二つの文章から抜き出してくつつけた、ということでは覚えている。それは

「平成」のつくり方と同じで、意味曖昧のまま馴れてしまうという点でも、同じである。元号というものは、そういうものがないと私はおもっているが、午後三時ころに新しい元号が発表になるときには、大いに興味をもってテレビを見た。

夜中までベッドを出ず、ずーっとテレビを見ていた。いや、見ているよりも、昭和の時代のあれこれのいろいろ思い出していた時間がはるかに多い。

小学生のとき、「天皇は神以上のものだ」と教えられ、「そういう存在はありえない」と反射的におもった。といっても、神仏にも大いに疑いを持っていた。こういうところ、生れつきとしかおもえない。外国の有名な家系図が二つあって、一つはバツハのもので音楽関係者ばかり。もう一つは大犯罪者のもので、こちらは犯罪者ばかり、あそこまではいかにしても似たところがあるのだろう。

これは中学生になってからのことだが、当時評判の石坂洋次郎『若い人』のなかで、一番強く記憶に残っているのは恋愛模様ではない。

カトリック系の女学校の生徒が先生に、

「神と天皇とどちらが偉いのですか」

と、質問する場面である。

先生はさぞ困惑したと察したが、その答のほうは覚えていない。

そんなことをつぎつぎに思い出しながら、テレビ画面に眼を向けていた。

私は軍国主義が大嫌いで、小学・中学と陰鬱な日が多いうち、太平洋戦争がはじまった。広島、長崎と原爆が落ち、昭和二十年八月十一日ころポツダム宣言を受け入れるという情報が入った。天皇がそのための玉音放送をなさるというのを聞いて、「これで戦争は終る」と咄嗟におもった。ただし、そのあとは、アメリカの奴隷にされるのだろう。それでも、軍国主義もしくは全体主義の敗退は、うれしかった。

同じようなことが、一月八日も終日つづいた。

十年間

『目玉』という本が、平成元年の九月末に刊行になった。短篇集としては、十年ぶりのことである。

この十年間、病気が幾つもかさなつて、病気に強い筈の私もかなり閉口した。といつて、ここで病氣について書いても、仕方がない。

「氣候がデコボコして、このところ辛いね」と、うっかり言うと、

「おや、氣候が悪いですか」

という答のほうに、圧倒的に多い世の中である。

医学的に原因不明のややこしい難病にも罹っている。これは、話が長くなるので、目玉の病氣についてだけ書いておく。右目が見えなくなりはじめたのが昭和五十一年秋で、その翌年には視力を失った。左目のほうも同時発病だったが、どういふわけか辛うじて見えつづけた。こういう状態で、辞書をたくさん引く仕事をしたり、個人全集二十冊のゲラ直しをした